

# FR-50

FOR ADULTS ONLY!!





みずほ先生の  
プラライズベイトレックス







あ……

カラ

一体何の音だ？



ん？



お前の乳生……

はああ……

くちゅ



ん……

はああ♡

あくッ んんッ

桂くん♡ンッ♡

桂君が私の事  
ほったらかしに  
するから……

私もう身体が  
疼いちゃって……

ぬちゅ

んちゅ

んちゅ





だッ誰ッ？



先生……



し……四道……君？

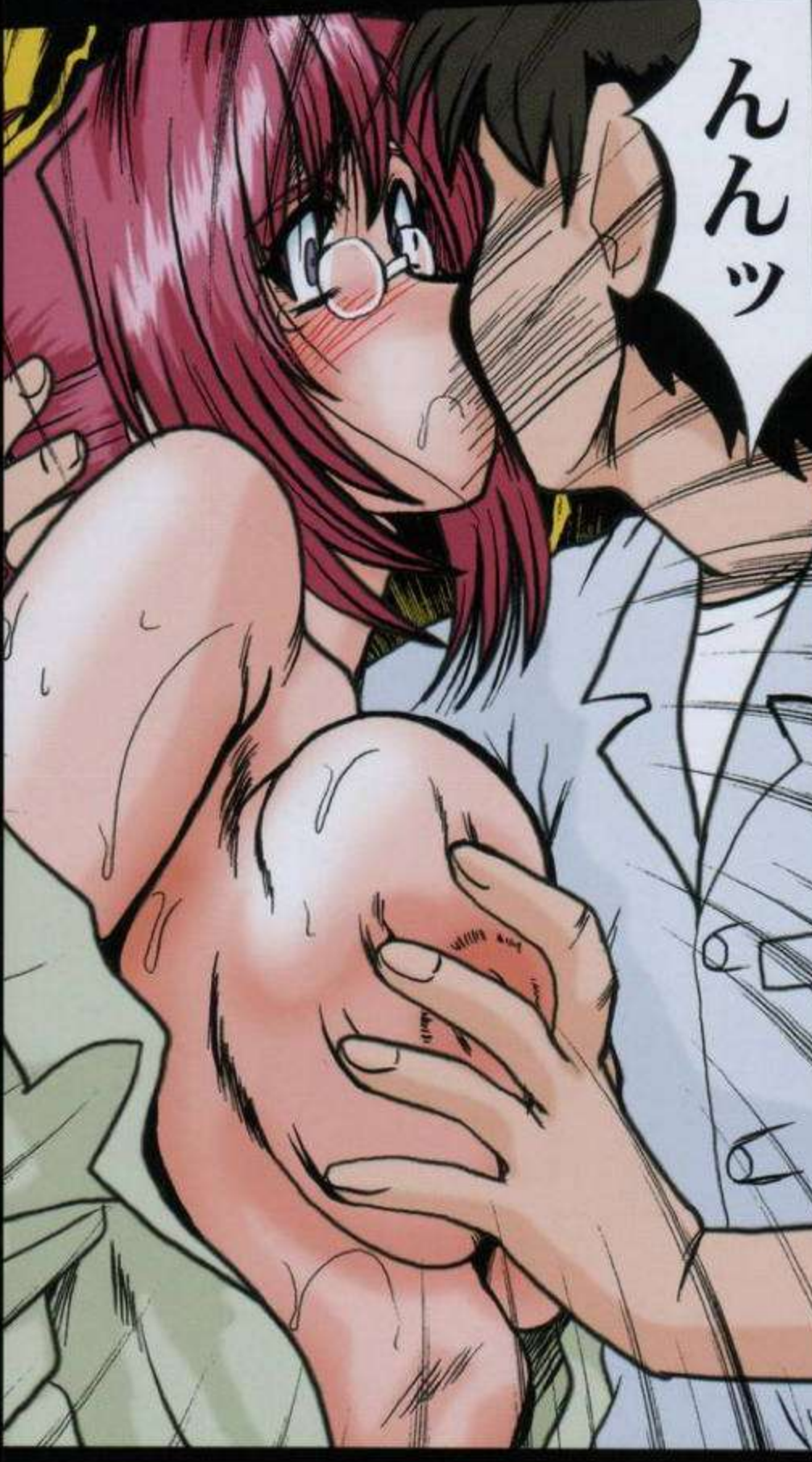


……





ちツ違うのよ四道君  
聞いてちようだい……



んんツ



憧れのみずほ先生が教室で独りエッチ  
してるなんて僕かアシヨツクですよ





あッ

ねエ先生エ……  
いいでしょう？

はあア……

ぬ  
ぢゅ



な、何の事？

この事は黙っておいて上げます  
から……ね？ 先生



はあ

とぼけても  
無駄ですよ

そッそんな  
四道君……やめ……





はあああ...



あ...



あつあああ...  
しツ四道君変な事  
言わないでえ...

先生のオマ○コから  
いやらしい汁が  
どんどん溢れてきますよ





オマ○コ指で弄りながら  
僕のチ○ポやぶってて  
何言ってるんです？



はああ...

だつてえ...

ぐわ



せつ先生入れるよ

だッ駄目よ  
それだけは……

うッうッ せつ先生エ  
は……入ったよ!

あふッ  
あああッ

うッうッ……  
すッ凄いや先生

はああ……  
こッこんなア……





はあアン♡  
こんなの初めてエ♡



四道君のオチ○ポ  
太くて硬くて素敵イ♡



先生エ  
桂のチ○ポより  
気持ちいいの？

桂くんのオチ○ポより  
気持ちいいのオ♡



それじゃあもつと僕の  
チ○ポを味わって下さい

んんッ

四道君の オチ○チンが  
私の一番奥に当たってるのオ♡

こっこんな……

あはあ♡



だッ駄目エ  
これ以上激しくされたら

私…おかしくなっちゃう〜

先生…僕のチ○ポで  
おかしくなつて下さい

ふうふうん♡





先生のオマ○コ  
最高だよ

あッ

ふっふんッ



あッああッ  
イッイクッ!  
四道君のチ○ポで  
イツちやうく

ダッキョ



イクイクッ

イツチャウッ







四道君：  
もつと先生の事を  
気持ちよくして頂戴♡



え…えつとオ…  
先生僕は…



いいのよ…



四道君：  
もつとみずほに  
オマ○コして♡

四道君、  
四道くん……？

ウヒヒ♡  
あ♡先生エ  
そんな事まで……

ウヒヤヒヤ♡































みずほ先生の

調教日誌  
秘

深田拓士







「ええ〜ツ？まだこれから家を出る所なのか？俺を

一体何時間待たせるつもりなんだ？」

駅前の待ち合わせ場所で携帯に悪態をついた後男はペンチに座り直した

「あの…御一緒してもかまいません？」

いきなり声をかけられ驚いた男の反応に構わずみずほはペンチに腰掛けた。

「本当に今日は暑いですね」

ちらちらとみずほを盗み見る男に微笑むと  
アイスバーを取り出し  
袋ごと頬に押しあてた。  
「冷たくてとっても気持ちいい…」  
その冷たい感触を楽しむ様だうっとりとした  
表情を見せる





「おいしそう…」

みずほは潤んだ瞳で袋から取り出したアイスバーをじつと見のめると顔を斜に傾けアイスバーを上から下まで舐めまわしはじめた。

いつの間にか辺りは静まり返っておりだれもがみずほの痴態に注目していた。

みずほはアイスバーを頬張ったままで顔を上下させ、舌を這わせていく。

「ん…うんんッ…」

赤く濡れた唇からもれる声は悩ましくアイスバーを舐める様はまさしく男性の性器の

愛撫を連想させ、みずほの美貌とあいまってアイスバーを頬張る横顔は扇情的だった。







「あッ」

胸元に溶けたアイスを落としてしまい困った表情をした  
みずほがそのアイスをブラウスの上から手で擦り付け、  
そのまま立ち上がり歩き出した。  
男達の視線はみずほの肌にぴったりフィットしたスカートに包まれた  
見事な脚線に集中し、その内の何人かは彼女の後を少し距離を  
置くようにしてついて行った





「はぁぁぁ…」

人通りの少ない路地に入り込んだ

みずほは遠巻きに見ている男達など居ない


かの様に自慰行為を始めた

「ん…ふっうん…」

白らの胸を揉み、身体を悩ましくくねらせ  
股間を弄る。







「彼女が、そんなに我慢出来ないのなら俺達が相手してやるぜ！」  
言うが早い男達はみずほに飛びかかり組み伏せようとした。

「あ、あれ？」

次の瞬間みずほの姿は元からそこに居無かったかの様に消えてしまった。  
男達は何が起こったのか理解出来ないまま  
つい今まで痴態を見せていた美女のいた空間を  
見つめるのであった。





「先生、あまりえを通して見せてもらったよ。  
すごいサービスだったじゃない」  
空間転位を行ったみずほの前でにやにやと笑う桂が  
立っていた。  
「うんっ、もう、あれは桂くんがそうして  
言ったから。」  
「ははは、分ってますっで」  
「ねえ、早く部屋に帰りましょうよ。  
わたしもう我慢出来ないの」

みずほは桂に身体をすりつける様にしながら甘えてねだった。  
『やれやれ、これじゃどっちが年上か分からないよな』  
呆れながらも服の上からみずほの身体を弄ぶ。  
『桂くんのいじわる…』  
『それじゃあこんなのはどうですか？』  
『え？』



「ほ、本当にここでするの？」

桂に命令されるままおすおすと服を脱ぐみずほ。

「何言ってるんですか、アオカンをしたかって言ったのは先生でしょ？」

「だ、だってあの時はまだ青姦の意味を知らなかったから……そ、それにほら誰が見てるかも分からないでしょ？」

「先生、本当は誰かに見られたいんでしょ？」

桂はみずほの両腕をつかむと後ろ手に縛り上げた。





「こんなきれいな身体してるんだもん服で隠してるなんて勿体無いよ」

縄で絞りだされ盛り上がったみずほの乳房をつかみ、その感触を楽しむ様に揉みこんでいく。

「あッ…ああん」

ツンと尖った乳首を軽くかむとみずほはたまらず色っぽい喘ぎ声をあげた。

「先生エ…そんなに気持ちいいの？」

「いやっ、知らないっ」

慎重しく繁った繊毛をかきわけみずほの割れ目を人さし指でなぞりあげると待ち構えてたかの様に秘裂からは湧き出る愛液でぐっしよりと濡れていた。







むっとする熟れた女の匂いのする肉壁に桂はわざと  
ピチャピチャ音を立てて舌を這わせた。

「いやッ！桂君そんな事しないでッ！恥ずかしいわ…」

「先生のここがいやらしくヒクついているからいけないんだ」

「そ、そんな…それは桂くんが…」

「分かったよそれじゃあ止めてあげるよ」

そう言うつと桂はみずほから離れた。

「あ、ああんっ、だめえやめないでえ、やめちやいやよ」

その裸体を悩ましくくねらせながらみずほは

おねだりを始めた



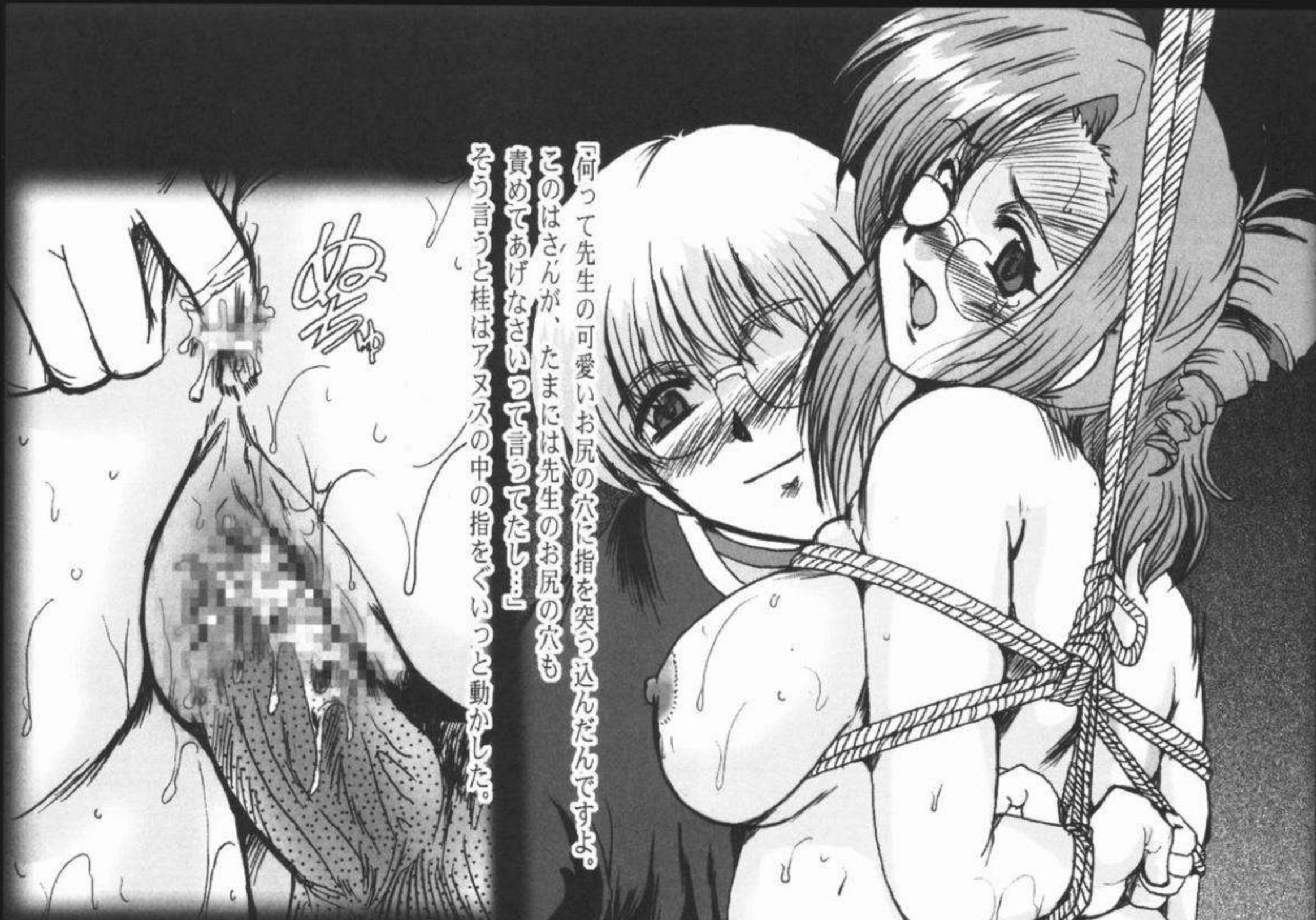
「はああん」  
たまらなくなつた桂はみずほを抱き締めそのまま濃厚なキスをし、ズボンを引き下げるのも  
もどかしく太く脈打つ肉棒を濡れそぼつた割れ目に突き刺した

みずほは上気させた顔を仰け反らせ悶え泣いている

「あふッ、あああ、た、たまらないのお」

みずほは桂の腰の動きにあわせて豊かな腰を揺さぶりはじめた





「何って先生の可愛いお尻の穴に指を突っ込んだんですよ。  
このはさんが、たまには先生のお尻の穴も  
責めてあげなさいって言うてたし。」  
そう言うと桂はアヌスの中の指をぐいっと動かした。

桂はみずほのむっちりとした尻を撫で回しその感触を楽しむと  
その深い谷間の奥深くに潜んだアヌスに右手の人さし指を  
深く突っ込んだ。  
「な、何をするのッ？」  
みずほは驚きの声を発した。



「ひ、ひイッソそんな処動かさないでエ！」

汗で濡れた裸身をくねらせ必死に逃げようとするみずほだが、  
秘裂に深々と打ち込まれたベニスと  
アヌスに差し込まれた指で固定されたあえぐ事しか出来ない。





『先生、お尻の穴も同時に弄られると感じるでしょ？』

『が、感じちゃうわ！私おかしくなりそう』

我を忘れて快楽にのめり込んだみずほの身体は吹き出す汗でヌルヌルになり、  
牝の匂いを発散していた。

『ああッもう駄目エ…イク…いつっちゃう〜』  
肢体を激しく痙攣させみずほは気をやった。





「先生、気持ちよかった？」  
だらしなく涎をたらし狂乱の余韻に浸っているみずほから  
ペニスを引き抜きながら聞いた。  
「よかったわ。わたし死んじゃうかと思っちゃった。」



「じゃあ今度はこれを使ってみようよ」  
桂は懐から浣腸を取り出しみずほにみせつけた。





「そ、そんな桂くんやめてッ！そんな恥ずかしいわ！」

「何を言ってるんだよ、先生が便秘で悩んでるのは知ってるよ。」

だからさ」

必死で逃げようとするみずほの尻を押さえ付け浣腸液を

注入しはじめるとみずほの下半身に痺れる様な

快感が芽生えだした。

ギョウウウウ





「あ、はああ……い、いい……」  
あつと言う間に何本もの浣腸液を注ぎ込んだ後  
肩で息をしていたみずほだが、ぐるぐるとお腹が鳴り、  
だしたとたんに便意が襲って来た。  
「お、お願いよトイレに行かせて！」  
みずほは太ももをこすりあわせながら  
上ずつた声を上げた。





「先生は今ここで僕の前にすべてをさらけ出すんだ」  
桂はまたみずほのアヌスをほじりだした。  
「ぞ、そんなやめて…だめ、だめだめえ！桂君わたしを見ないでエッ」  
みずほは女性としての最大の恥辱をぶちまけた





桂はまだ固のままのペニスをみずほの

ひくついたアヌスにあてがった。

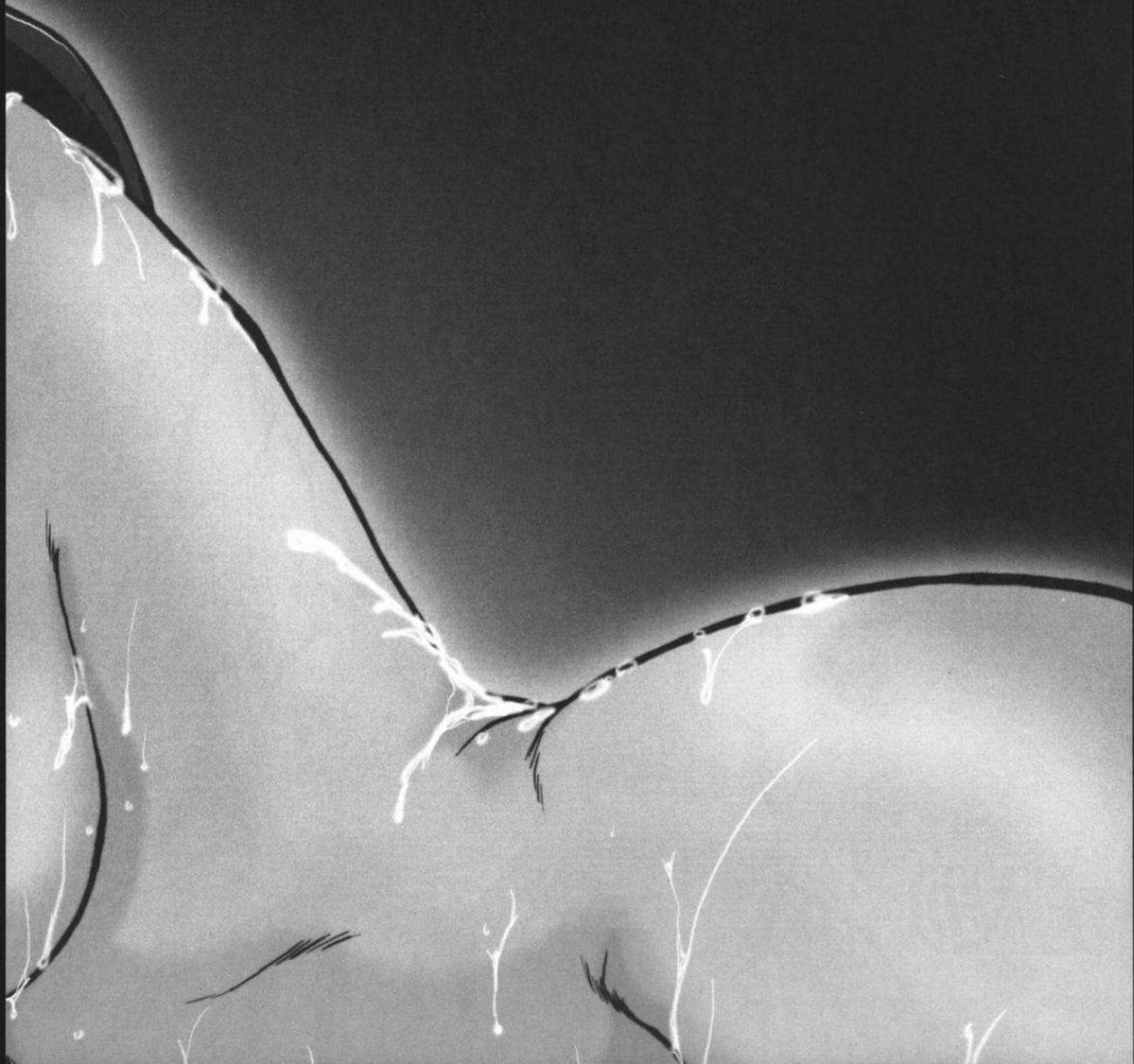
「そ、そんなだ、駄目よそんなの入る訳無いわ」  
「大丈夫ですよ」こつちの穴ももうすつかり  
ぼぐれてるじゃ無いですか

「んああアツッ！」  
今日何度目かの絶頂を迎えながら  
みずほは暗い意識の底に沈んでいくのであった。

END



椿-TUBAKI-







# 椿

TUBAKI

深田拓土個人誌



# *F-50*

## *Contents Index*

03 : みずほ先生のプライベートレッスン

19 : イラスト

26 : みずほ先生の調教日誌

46 : 目次

47 : 美畜奴隷 椿

62 : 後記





副会長、よく  
来てくれましたたね


本当にあの事は  
黙っていてくれるのね？

もちろんですよ副会長  
あなたが俺達の言う事を  
聞いてくれるのならね？

美富奴隸

椿





それじゃあ  
早速始めますか

あッ



嫌ッ  
こんな事やめて…

何言っただよ  
アンタだっけこうなる事  
覚悟して来たんだろ？



!!

ちめっ  
ッ





一体何喰ったら  
こんなにかく  
なるんだ？


あッ

こんなにいやらしい身体をして  
本当はこうされたかったんじゃないのか？

あッ

ああッ





そんな事  
あるわけないでしょッ

無理すんなって  
こっちはもう  
こんなにグチヨグチヨじゃ  
ねエか



早くオレの  
チ○ポを  
しゃぶってくれよ

そ、そんなな…  
やめて…

副会長さんよ  
何でもいいから  
早くしゃぶれよ



副会長は  
お口を使わせても  
優等生だな  
マジで気持ちいいぜ

んっんんんんんんんん






そ、そんな  
やめて…

オレももう  
ガマン出来ねえぜ  
副会長のマ○コに  
ブチ込んでやるッ





それは  
聞けねえな

んんッ

オオッ  
やっぱり副会長の  
オマ○コは最高だぜ

んっんんっん














こ、こんな…  
だ、駄目ッ  
イツチャウ…  
イツチャウッ





副会長  
ありがとさん  
気持ちよかったぜ

また今度  
オレ達のチ○ポの  
相手、よろしく頼むぜ

**END**







# 後記

またもや”おね☆〜”本です(^\_^)>

本来は一番はじめのフルカラー漫画を描きたかっただけだったんですが、いざ描いてみると何か物足りないものの、作業時間も殆ど無かった為、この際コピー誌で出していた”おね☆〜”本のいくつかもちゃんと印刷物にまとめて見る事にしました。コピー誌を持って下さってるお客さん申し訳有りませんm(\_ \_)m

とは言え当初は単純にコピー誌用の原稿データをそのままオフセット用原稿に転用すれば良いとかなりお気楽に考えていたのに今改めて見返すと、自分的に許せないところが有った為、結局一番古い”みずほ先生の調教日誌”なんかは本文は全てのページに手を加えるなんて本末転倒な事にもなってしまいました。(苦笑)本気で時間が無いのに何やってるんだろ>俺

本来ならまだいくつか(カラーも含めて)みずほ先生ネタのものはまだ有ったんですが、流石に今の段階でも印刷コスト等を考えると……(T\_T)

”F”シリーズもとうとう50号目と言う事でえらい処まで来てしまいました。周りからはこれだけ大きな通し番号を本のタイトルに使うのはかなり恐ろしい加減にしたらとどうかとも言われてますし、キリの良い番号まで来た事も有りますから本のタイトルもちゃんと考えてみる時期かも知れませんねえ……(^\_^);



## 奥付

誌名：F-50

発行：ぱるぷんて

発行日：2005/03/21





# F-50

深田拓土個人誌  
powerd by ぽるぷんて

